

高山の文化を高めた人々

38

飛驒の近代登山と 出版文化に尽した 住 廣造

池之端 甚衛



「高山ですか。高山には、山岳会の先輩の住（廣造）さんが居られますね。」

これは、前飛驒山岳会々々長伊藤藤茂氏が若い頃、日本山岳会々々長榎有恒氏（アイガー東壁・初登、マナスル登山隊々々長）に初めて会った時、最初に言われた言葉でした。

住廣造さんは、明治十三（一八八〇）年八月二十一日、安川通り（現・十六銀行高山支店所在地）で生まれ、二十代前後から住伊両替店、書籍販売の住伊書店を営む傍ら、飛驒山脈の主な山を踏破するなど飛驒で初め

て近代登山の道を開いた一人でした。

住さんは、明治四十一（一九〇八）年の飛驒山岳会の発足に幹事で参加し、翌四十二年九月日本山岳会へ入会しました。入会順を示す会員番号は一九三で、榎氏の会員番号は三四一です。住さんは、日本山岳会の草創期に加わった一人となりました。

日本山岳会による近代登山の嚆矢となった大正三（一九一四）年八月、北アルプス双六岳・笠ヶ谷を初踏破した日本山岳会発起人の一人・小島烏水（銀行家・文筆家）が記した紀行文には、高山で旧知の住さんの歓待を受け、住さんや詩人・福田夕咲氏らと夜遅くまで痛飲したことなどが記されています。

大正十二（一九二三）年八月、住さんらは二年前にアイガー東壁を初登した榎有恒氏を招いて講演会を開いており、当時の最新の登山技術・装備を直接吸収しようとする飛驒岳人の積極的な意気込みが窺えます。

『日本山岳会百年史』によると、重要な会員が死去した際に、会報『山岳』に追悼文を掲載するとありますが、住さんの逝去（昭和三十九年十二月十二日、八十四歳）の翌年の『山岳六〇号』に、第六代日本山岳会々長・武田久吉（英・外交官ア



住廣造氏後列向かって左端。福田夕咲氏前列右端。岡村利平氏中列中央。

ネスト・サトウの次男）の追悼文が掲載されました。

住さんの凄さは、両替店・書店・印刷所経営などによる資金をもとに、採算を度外視して、飛驒の貴重な歴史叢書の出版を続け、飛驒の歴史を学ぶ人々に多大な恩恵を与えたことにあります。

最初の出版は、飛驒国七代代官長谷川忠崇が、八代將軍吉宗の命によって、飛驒統治を進めるうえで必要な基礎資料を、三人の息子に協力させてまとめた『飛州志』で、明治四十二（一九〇九）年六月、東京で印刷されました。この他に出版された叢書は『飛驒山川』『飛驒遺乗合府』『飛驒史料』『岷江記』『飛驒編年史要』等があります。

大正三（一九一四）年の岡村利平・押上森蔵らによる飛驒史壇会には、幹事で参加し、月刊

誌『飛驒史壇』の編集・発行を担当し、当初は岐阜、大正八（一九一九）年からは、下三之町に興した斐太中央印刷所で印刷し、昭和八（一九三三）年一月まで発行し、飛驒の歴史研究の成果を発表する場を提供し続け、飛驒の歴史研究の発展に測り知れない影響を与えました。

住さんの遺言を託された故漆山義雄氏（飛驒運輸株式会社々々長）はその著書『想出のままに』で、「住さんは高い見識の持ち主で、信義に篤く、頭脳明晰であつたが一つだけの欠点は、相手の痛い所をずばりと突く癖があり、高山の人からは敬遠されがちだった」と記しています。住さんと親交のあつた私の父・宗一も「住さん宅を尋ねる人は、地元の人よりも東京などからの経済人や文化人やつたなあ」と話してくれたのを思い出します。住さんが収集した書籍・書簡・郷土資料など二千五百点余にのぼる膨大な資料は、遺言によつて高山市へ寄贈され、『住香草文庫』として、高山市郷土館で閲覧できます。

（本稿執筆では、飛驒山岳会の伊藤藤茂氏と山口章氏に御教示を賜り、筑波大学名誉教授・住斉氏著『佐久良組の人々』を参考にしたことを記し、謝辞とします。）